光田作治歌集

水甕叢書二一四篇

光田作治歌集

―残心抄―

初音書房刊

© 1969

N.D.C. 911

昭和四十四年十一月五日　印刷　光田作治歌集
昭和四十四年十一月十日　発行　―残心抄―
定価　八百円

著者　光田作治
発行者　小島清
印刷者　西村勝善
発行所　京都市東山区三条通白川橋東五　初音書房

水甕叢書
第二一四篇

刊行会
京都市左京区下鴨中川原町四一ノ三
前原利男方
光田作治歌集刊行会
電話　〇七五―七八一―〇〇六四番
振替（群落の会）京都四一二二〇番

印刷　西村印刷KK

序

加藤将之

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

多年の盟友、光田作治氏の思いもかけぬ病歿の日から、早くも半歳の月日がたち、今宵は新盆の日にあたっている。京都における友人諸家の骨折りによりその遺歌集が出版される運びに至ったとき、よろこびの情また格別である。

生前、歌集出版のことを気にしながら、ついに実現を見なかったので、故人は最後の入院中にも、このことを気にかけていたらしい。あわれの深いことに思う。どちらかといえば、意識過剰のところもあって、いつもふんぎりがつかなかったようである。そのくせ、人のためになることなら、水火も辞せず、犬馬の労をとるのを生き甲斐ともしていた人である。損なたちだったとも言われようか。

氏の短歌開眼は早い。岡山の中学時代から歌を作り、水甕入社も大正六年、中学三年のころからというから、わたしなどよりもはるかに先輩である。そうかと言って、別に先輩ぶることもなく、気分はいつも若々しかった。氏の六高時代、京大時代、それ以後のことについて語るのは、わたしの出る幕ではな

い。わたしとしては、大正十二年、まだ八高生のころ、石井直三郎先生に名古屋からお伴をして、京都の円山公園での水甕歌会に出席、氏にも、お目にかかったのが最初の出会いであることが、今となっては、いよいよなつかしまれて仕方がない。以後、氏の厚誼に浴したあれこれのことを言えば、はてしのないことにもなりそうである。

歌人としての光田作治観は、人によっていろいろの見方が可能であろうと思う。お人柄であり、つねに大人びていて、明朗であり、多趣味であり、センスに富んでいた光田氏であるが、歌そのものは、必ずしも明るいとか、朗らかというものばかりでなく、むしろ陰翳に富んでいると言った傾向だったのではあるまいか。内面的に深まろうとする志向があり、それがあまりにも良心的に、また敏感に作用して、収拾のつかぬといったおもむきさえも、時には露呈させていた。

この点、氏の歌は氏の朗詠の美しさとは、対照的な面をも示しているかのようである。光田調とも言うべき、その音楽性にマッチした朗詠は、早くも昭和

の初年ころに、電波に乗ったことがあって、今更のように驚歎したものである。その朗詠も、晩年にきいたものには、悲哀の底をかきえぐるような哀切感と共に、それを放下したような抑圧感もふかかったようである。そして、その作歌にも、そういった複雑な感味をつねに帯びてきていたと思うことである。おしなべて氏の歌は、単純素朴のものとは言えないようである。それにしても氏の病歿は、あまりにも早く、あまりにも意外であったことを歎かせる。これから、渾然たる光田調の面目が出るんだぞと、わたしなどは、ひそかに期待もしていた折柄のことだったからである。

入院中のわたしへの私信にも言っていたことだが、ご本人としても、これからやるぞというところであり、そこで命終となり、いかにも無念のことであったろう。この遺歌集については、どうしても故人のこの無念さについて、一言述べておかなくてはならない。それ以上のことは、もはや、言わなくてもとまで、今のわたしは思っている。

氏の文筆上の業績、その他いろいろについても、ここでは割愛する。周辺の一人として、君の無念をおのれの無念とする一端をのみ述べて、この遺歌集の発刊にはなむけたい。はかなさをこれ以上はかなんでも、故人は帰って来てはくれないのである。

昭和四十四年七月十五日

目

次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

序　加藤将之

晴曇抄　昭和二十八年～三十三年
落花晴曇　一七
嫁かしめて　二三
わが思惟　二六
善妙神女讃　三三

春秋抄　昭和三十四年～三十七年
学生茶筵　三七
春秋抄　四一
春暁・雨情　四六

渋き暖簾　五一
紅毛の娘　五六

早春抄　昭和三十八年～四十年

四月尽　六三
竹伐りの頃　六七
早春抄　七一
鑑真和上遠諱　七五
周辺抄　八三
はなれ里　八八
流るる霧　九一

無月抄　昭和四十一年～四十二年

無　月　九五

古刹林泉　一〇〇
推　移　一〇三
暁　闇　一一〇
古刹雨情　一一八
新村出先生追悼　一二一
祝賀会余情　一二四
奈良早春　一二九
飛雲閣にて　一三三

残心抄　昭和四十三年～四十四年

逆光の中　一三七
学寮余情　一四二
旦　暮　一四七
勝間田氏追悼　一五一

大聖寺賀筵　一五三
奈良にて名月　一五六
慮外　一五八
絶詠　一六一

作品　三八三首

略年譜
あとがき

口絵　遺影　筆蹟
自作朗詠譜

光田作治歌集

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.